水曜日　11月2日　主は私たちのために死なれた

イエスがバプテスマを受けるためにヨルダン川においでになっとき、バプテスマのヨハネは次のように叫びました。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(ヨハ1：29)。この言葉は、キリストが旧約時代のすべての犠牲が指し示していた神の小羊であることを認めるものでした。

動物の犠牲そのものは罪を取り除くことはできませんでした（ヘブ10：4)。それらは、将来、キリストの十字架の犠牲の効力による条件つきの赦ししか与えませんでした。「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます」(1ヨハ1：9)。

問5　ヨハネ3：16、17を読んでください。自分の犯した過ちのために、非難されて当然だと感じるとき、私たちはこの聖句からどんな大きな希望を得ることができるでしょうか。

ヨハネ3：16、17は、宇宙を創造されたお方（ヨハ1：1～3）であるイエスが、私たち一人ひとりのためにご自身を罪の犠牲として捧げてくださったことを意味しています。それゆえに、私たちは、当然受けるべき非難を受けなくても良いのです。これは、福音の大きな約束です。

イエス・キリストは、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハ3：16）と宣言されました。しかし私たちは、キリストが私たちのためにご自身を自ら捧げられたこと（ヘブ9：14）を決して忘れてはなりません。ルターは十字架について次のように述べています。「彼〔キリスト〕の心に燃える無限の愛の炎によって焼き尽くされた祭壇は、熱烈なとりなしの祈り、激しい叫び、そして熱い嘆願の涙とともに天父にささげられた（ヘブ5：7）彼の生きた聖なるからだと血による犠牲を表していた」(『ルター著作集』第13巻319ページ、英文)。キリストは全人類のために、ただ一度（ヘブ10：10)、また、唯一のいけにえ（同10：12）として死なれました。なぜなら、その犠牲は、十分であり、その力を失うことは決してないからです。「たとえただ一人しかキリストの恵みの福音を受け入れなかったとしても、キリストはその一人を救うために苦労、屈辱の生活と恥辱的な死をお選びになった」(『ミニストリー・オブ・ヒーリング』新装版83ページ)。